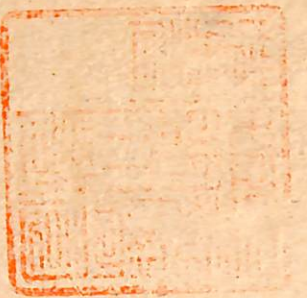


凌稿

911.3
7
下

下





綾錦卷之下

三十一、六番句合

一番

左

首歳不三

蓬萊千仞の秋の心 山 霧 沾

月影を照らす 雲の心 月影を照らす 雲の心

右

春不三

心は同じく 春の心は同じく 春の心は同じく

○新勅撰

○身延の心 〆井の心 〆井の心 〆井の心

○碧天雪白雲間 走卒兒童亦仰顔

東海初遊多火客 富山不取回何山

沾涼緝

沾涼

二番 左 齋

藤びしといたしかりの斎菴 吟市

○枕をさし おぼめしきまの柳のこえをきこふ
たしとてあはれ又つてさるる公事と
たしとてあはれ又つてさるる公事と

○世談問答 正月、女湯の月くし又七日、女湯の湯
ふた州を始ぬぬのあまふまを喜舎と信く

右

みまもらんさるのさるれも雪齋 沾涼

○古今集序 人九に赤人のみまもらんさるれも雪齋
みまもらんさるのさるれも雪齋

三番 左 梅

○果堂禪語 梅花、悟入、師 東隣

○果堂禪語 梅花、悟入、師

右

碧巖集 隔山見煙早知是火 布仙

○碧巖集 隔山見煙早知是火 布仙

隔山見煙早知是火

四番 左 初午

一月の水にと拍子きふの午 魚路

○杜詩曰 魚吹細浪搖歌扇燕蹴花 花落舞筵

○千載 三室山谷子やまのまめん音乃下水

中絶言周信

右

風吹枯木暗天雨 月照平沙夏夜霜 沾涼

誰激計會一時秋

風吹枯木暗天雨 月照平沙夏夜霜

○金葉集

松風の巻せさりせは夏の祀何よのま

良運法師

○續古今

五月あふふるぶるり浮如雲

法威法師

右

辰白小艇 藤 足せん 海 岸 沾 涼

○指 遠 刻 古 の 浦 の 舟 へ 白 小 艇 浮 せ

ゆん ぬ 人 の 舟 先 人 丸

八番 左 ひんぎ

○吹 下 又 拭 けり 名 標 東 巴

○新 後 指 送 吹 下 の 夜 には 舟 も 口 なる けり

ゆん ぬ 井 へ 舟 丸

○名 抽 井 地 の 大 匠 の 堂 へ 舟 せ 横 舟 丸

その 舟 丸 舟 丸 舟 丸 舟 丸 舟 丸

舟 丸 舟 丸 舟 丸 舟 丸 舟 丸

右

○過 難 山 人 所 居 寂 孤 常 啼 杏 園 沾 涼

○ま 本 抄 湖 へ 舟 丸 舟 丸 舟 丸

寒 大 吠 挑 源

○ま 本 抄 湖 へ 舟 丸 舟 丸 舟 丸

いぬ の 舟 丸 舟 丸 舟 丸

九番 左 ひんぎ

九 一 万 里 を 渡 せり 今 三 流 雲 蕉 正 典

○歸 去 來 辭 鳥 倦 飛 而 知 還 兮

○莊 子 內 篇 北 冥 有 魚 其 名 為 鯤 鯨 之 大 不 知

其 幾 千 里 也 化 而 為 鳥 其 名 為 鵬 下 略

右

○新明記 何すかぬいほ里も又ささく山田の
そゆさるはゆさく立機うぬ 園を

十番 左 郭云

東塚乃あふら海々物いーん 千法

○拾遺 時をぬいほ里も又ささく山田の
多田のあふ今中さん 洋守田家

○新撰古今 けさるあふらひのまをわく風さる
田のさあふらあさりしし 松林茶太監下

○月 ころあふらあさりしし 中あさりしし
時鳥 郭云 子規 勸農多 杜鵑 鷓鴣 杜宇
鷓鴣 蜀魂 望帝 別都の望帝 轉 三解須臾割 綱多

董子多 首直多 當之多 安常多 不知婦 四百田長

○時不熟多 妹春多 常記多 女涙多 袴多 百多
夜多 玉多 早苗多 田哥多 羊多 戦多
誰波多 蟹多 宇津野多 田長多 仙多 免律良多

右

檜裏乃灯ハ志多り郭云 泊京

○拾遺 ころあふらあさりしし 中あさりしし
ころあふらあさりしし 忠見

○袋草紙 倭札云折中子時びる哥を誦さる
あさりしし 前斎交ぬ京の時候の
ころあふらあさりしし ある名子多さる一多
ころあふらあさりしし 三哥をよまると
に女房の初りして 渡のさるのまに夜さる

ころあふらあさりしし 中あさりしし
ころあふらあさりしし 中あさりしし

十一番 左 田云

信州松本

脊中乃子泣いさか来て田植多 三省

○枕ま子 加茂のまじりきるなすのまじりものあり
らゝのまじりきるなすのまじりものあり
おろくくまじりきるなすのまじりものあり
んまじりきるなすのまじりものあり
いふまじりきるなすのまじりものあり
いふまじりきるなすのまじりものあり
いふまじりきるなすのまじりものあり

眼明の袖はくまの田へぬ 布仙

○千載 廣瀬川あそびの小田にせられた袖づく

○催馬樂 沢田川袖はくまのりあそびとまね

あそびまねとまねのりあそびとまね
まねのりあそびとまねのりあそびとまね
まねのりあそびとまねのりあそびとまね

十二番 左 及び

山 下 一入下 趣 油 八号 具 竹

○大和物語 二引をきりあそびのりもまの東のり

○丙辰紀行 羅浮子云英法小背墓を遠にの池田するの

武史伝傳のあそび 藤るを門よつるたす金
あそびを門よつるたす金
あそびを門よつるたす金

右

とろかーのり一里も夏の東明のり 沾原

不道 夏の夜にのりあそびのりあそびのり
あそびのりあそびのりあそびのりあそびのり
あそびのりあそびのりあそびのりあそびのり

三番 左 竹子

鴨 山谷詩 竹 筍 初生 黄犢 角 野刈宇都宮 立鴨

漢書 門ヲ閉ル 樊噲コトトセスカ ヲ生ノ門ノ 團推傳門

下

六

右

けのくゆ 今雪折を盛じき 沾涼

○文本抄 月夜に花をいれぬと人とならざるを
きく一おりのあつてくらん 和歌式ア

十四番 左 野渡

月夜におくくさり跡乃船 倫仙

○船取子行 大和物語云、下野乃舟にたると舟に
まゝりきりし、こゝろすもゆる船の男、おまうけて
んかひききいばあふあうまもれもを今ぬぬの
あひ、ささいささいささいささいささいささいさ
いと程させてなまなりらうやの物ものささいさ
をささていぬたの、ささいささいささいささいさ
ありゆかきささいささいささいささいささいさ
ささいささいささいささいささいささいささいさ

右

届しをて漕てあす揮、陰 沾涼

○棟 歳時記云、自初春至初夏有二十四番
風始於梅花、終於棟花、謂之花信風

十五番 左 みるみ

ひまぬ百も水新らりき涼、紅夕

○方丈記 水のさうもこのまもさしてささいささいさ
あひ、ささいささいささいささいささいささいさ

○後熟草 涼、ささい足法を裁ぬ涼、涼、沾涼

右

涼、ささい足法を裁ぬ涼、涼、沾涼

○後熟草 涼、ささい足法を裁ぬ涼、涼、沾涼

十六番 左

夕立

越前田中
北仙岡

夕立や 雨のふりて夏の湯氣 南花

○若葉春云 雨とてしおすく死ふるあひやう
○あつたる夕立のふりてあつたる夕立

右

夕立や 雨あつたる武藏 沾涼

○菅家御集 夕立のふりてあつたる夕立

十七番 左

あつた

歎乃耳に 宵のふりてあつたる夕立 一唐

○走獸ノ中チ象ノ耳ハ異ナリ 異物志云象ハ身數

半ニ倍ス鼻ノ口ノ役ヲナス 馴良ニシテ教ヲ

言ヲ亦トキハ 蹄ツク

右

石炭ノ 牛のあをの 雲のふり 樹立

○夏ノ日 極ノ熱天 燥石 治法

○格物論云牛ノ母ヲ牝ト云父ヲ牝ト云子ヲ牝ト云

○人ハ牛ノ角をさす 人ハ馬をさす 耳をさす

十八番 左

蟬 田茅屋

水戸

蟬のあをの 雲のふり 沾橋

○智度論云 春未甚 初以時熱故 小眠息除食患

右

蟬のあをの 雲のふり 沾涼

○智度論云 春未甚 初以時熱故 小眠息除食患

十九番 左 稻川

人ハ此カ申ス事ヲ持繼ル如 逸志

此川ノ水ハ海ニ入リテハ 稻川ニシテ止ル事ナリ

○智度論云一切室中命ヲ為第一諸罪中殺生

罪ヲ為第一諸善中不殺生戒ヲ為第一

右

白髪ノ人ハ 海ニあり 稻川ノ 涼之

○莊子雜篇漁父 有漁父者下船而來鬚眉

交白披髮 掄袂行原以上

○*（Handwritten note in cursive)*

二十番 左 長北坂

カノ坂ノ坂ノ下ニ 水戸 沾渡

○拾遺 川ノ水ハ海ニ入リテハ 稻川ニシテ止ル事ナリ

○土史 投 廿二丁目より五十六丁目までの間

右

○*（Handwritten note in cursive)*

○神社考云 玉城百山名愛宕山秀出ス

於嵯峨城万仞之上

○三十三丁目笹原ノ云あり丹波國眼下に

廿一番 左 一葉

秩父小川

○*（Handwritten note in cursive)*

○淮南子 一葉落天下知秋

○千載 却子ハ其ノ心ヲ去ル事ナリ

○東鑑云 文治五年七月廿九日白河内國を以テ

因神所奉幣。此る景季をらし出河の
初秋なり徳因。右月之ひ出らるるの
伴出さる京季馬をひく一首を添す。

秋月よまのちををりて君の飛進を國に
不破 菅光院殿居士のひもひを添す時
ひそてなりし女園を民衆もあはれ
ふりまはるる心ざりてありしなり。

此のうて月を添す添すはしるはせよの
世に

右

色ハ鯉乃一糸の如 沾涼

東鑑云 文治六年十月十二日道は菊河宿の
あまの作、本三郎盛徳下りて未副鯉の楚
割を折、あまの右子息、
進ス申す云、今割、
とらるる鯉如なりしを、
此は自色、
くらくは人の、
たけ

廿二番 左

聖

今抄類ト云

月ノ 雁ノ 数ハ、
祖泉

○聖分卷云、
そのあつた、
さし、
おのひ、
うら

右

物を添ふに、
沾涼

○襦衣 熱の、
さ、
司、
と、

廿三番 左 月

月 活、
千楓

○徒然中 望月のくぬなれを子星のふまて縁
しるすも境いしなれすまらぬいふるいし
ふふりしあをさるるまじくされこの縁
おきいふんえらるるまのるのけしし
むきかふあゆとすいぬくあましし推は
まらぬのぬもさるるなるものふまらぬ

右

我池のまもるる月し蓮の茎 沾涼

○朝明夜 月の背あかきも今そらん人も
えり宿の池のくぬなれ水底院

○愚問賢 誰か常の余もいふ人も人の業の及そぬ

○月影 月影のくぬなれさるるあまらるるもの
りまらぬ月影のほろとて出たれいひる
月影のくぬなれさるるあまらるるもの
あまらぬ月影のほろとて出たれいひる

廿四番 左 冬丸

○ま本抄 酒のくぬなれをびーまらぬ
あまらぬ酒のくぬなれをびーまらぬ

○詩曰

坐對賢人酒 鮮于輔曰醉客謂清者
為聖人濁者為賢人

左 右

つむらぬも曾子の形りや大冬丸 沾涼

○象多也 曾目ナリ 程子曰象多也竟以魯ラ得之

心多也 ぬらぬら 望み望み ぬらぬら 素堂

廿五番 左 冬丸

○僧祇律云有舍利名塔無舍利名支提
塔の根 左 隣

○下

○上

右

とよらよと鳴るやささしみの秋の青 梅九

○品川鮫頭補陀山海晏寺とよらよ

○新勅撰 誰か花梅の種をて

よの夜を去のふしなやの海系抱松波

○鳴 送孟東野序 以鳥鳴春以雷鳴夏

以虫鳴秋以風鳴冬 下略

廿六番 左 跡泊碑

水戸

管 舟の管を探る 舟の管 沾瑞

○秋夜宿淮口 風帆幾處客 天地兩河星

樹靜禽眠 沙寒麻過汀

引のいさぎの人の舟は海沖に しまり

右

とよらよ撞麻子よらよや 残まら 沾涼

○我々の里にしてよらよの撞麻をこをたはさるれ

三井の端

○日本記 甲をばのなほを撞くといふ下子とよらよの

うらやまけさういしよのやの舟の舟子男を撞く

をこもるるまといひりれせ女麻の二やうあり

がれて志ををまうもんるるありなりといひて麻

をこをりたりしやうさうおそりありあり

を討ころしすてそ皮をぬきわらしめりたり

とよらよの若中を身の中しとよらよの周りあり

兵庫の山

廿七番 左 秋海業

皓魄臺

待てよ下 秋海棠の風をくく 露庭

○権徳興詩 空国孤燭夜 羅幌独眠時

○新明題 一詩をよしよそのたのむをたのむ
ころをつらむに花のいろを

右

是もよまのい杜が母は必そ妹はくれ 沾涼

○詩話云 杜子美母名海棠故集中其海棠詩

廿八番 左 洛葉

松の背より瓦をかつく落葉の景 巾車

○菅家御集 刈藪をれをたふさふ人よあこ
ついであつてをささぬふかひなり

右

今朝のりし申渡ぬ木の葉や田子の浦 布仙

○西辰紀行 富士門の海たす一の急流のり下敷

○新古今の古 後江家流の海へのたふさふも奔河の海で

紅葉落れとらふ心をたふさふもよまふ葉落葉を
幾土よほてささるる水といふもささるるたふさふなり

廿九番 左 ちん

海をへひよささる 紙はらうらぬ 賀朝

○鶴鶴越 須戸の北よりささるるし木原らささる

ささるる取のささるるの 鹿ささるるささるるささるる
ささるるささるるささるるささるるささるる

○歌枕 指聽 半夜 鐘

右

ぬささるるのささるるささるるささるるささるる 沾涼

○洛葉卷 ちんささるるささるるささるるささるるささるる

ちんささるるささるるささるるささるるささるるささるる
あつてささるるささるるささるるささるるささるるささるる
ささるるささるるささるるささるるささるるささるるささるる

三十番 左 小

飛舟くして子、素男の巨艦江 東江

○撰集抄 むし中絶言既基と云は後泉帝
乃時既流せしるるの也飛舟くして巨艦月
をえんやと酒をかりしむ

右

二方の箱より貞女北あふりぬ 布仙

○唐詩注云 賈直言空事退嶺山素董氏云
昔死可別嫁妻不谷引継束髮君非等
不解直言照三十年還暑帛宛然

○修物抄 月ありしむびとむし 菅原

○紅葉 山ありし我下細のよける人
まゝとてぬきしむし

世一番 左 志

まゝとてぬきしむし底な 櫛の上 雪朝

○新明記 山ありしむしむし 流るるむし
舟もなれたるの板と 道見

○温庭筠高山早行詩 人迹板橋霜
鶏声茅店月

右

霜とものよふの芳事なれば 沾涼

○月と洛鳥啼霜满天

○新古今 月と洛鳥啼霜满天 沾涼

世二番 左

三重のい香の志くぐり花元浩 音里

○白氏文集 与君結髪五歳

○詩人玉屑 箕重兵天雪 鞋香楚地花

右

髪並や志くぐりはの糸柳 布仙

○若菜巻 くの山をくをのそんたけり人より

はらひたうさうさうけられたあきあきす

二月の十日もんの古柳のこころ志くぐり

あはれらしてうらみすのぬをほろろぬ

世三番 左

我やうら 枯ゆり 思ふに九合の 涼宇

○さうか台記 生あくとあひのくす申くきた合

スえり日のうさうさまでいし物年とあひ

さびく神あまてしうたをすけあひあひ

右

聖ハ枯ゆりかのみくすう三の富士 訖氷

○さうか富士郡

あまの根をくすくすくあひあひあひあひ

○むつ岩城山

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

○さうか 頼娃郡

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまの

世四番 左 修ら

紹州若山

方園のまゝを借し銀竹の如く一執

○丈本抄 修井首いけのうらみさかめあま

○水噴方圓器

右

凡の研り堂のちりまの修らるが 梅土

風磨氷ヲハ寒兒

○文選朱玉風賦 其風中人狀直カキタニセコイリ替カハシ淋カハシ凍カハシ

○新勅撰 小のゆきし井の修らるるは

○宗祇名不方角 比取口より山脈部を一里ある草

より修らるるあり誠王堂といふより修らるる井

世五番 左 修ら

月より修らるるも雪の 未石

○無門関云 春有百花秋有月 夏有涼風冬有雪

○修らるる ころの正月 四月 五月 七月 九月 十月

右

雪の根乃何取馬 沾涼

○延喜式 凡諸国驛路邊植菓樹令往來人 得休息

○二里郊 鐵田信長使の三十六合を盡し一里と 二十と所より修らるるあり

人ものし我も死んごとくさるる

五首

○荒木田守武世中百首

母の申の心をあはれと習ふと家なむくも人おらん

○西行賦云 花依風散人依友知惜

右

信濃なる蔵書車やうとら上 沾涼

○流石湖の氷のふを狐のふくも人馬住ぬと云

○述異記河水如蛇合ス狐先行テ後渡ルコトヲ得ル

狐河水渡ラントニテ水声ヲキイテ后スルト云

○無門関云 春有百斗好百姓 其非亦難言

○此三十六番八百合らふ道を経て 清と云ふは

寺古詩古番古流流の句のふりよるおあなるの

○他國宗匠大略

●貞徳 良徳 良保 常矩 又季吟門ト云

和及 竹亭 現暮四

柳とえく 高桑 種歩 左山外 和及

中北月 勢至と 阿そく 竹亭

下 藤や 小妻の 春の 後す 暮四

●貞徳 梅盛 信徳 信安 神哥存 去多平

とく 柳や 折子に 少びし 時西 信徳

河 流の 鏡乃 濁す 信安

●現 露沾公 沾徳 現 仙鶴

中 年 生れもの 五月 雨 京 仙鶴

六貞徳 季吟 芭蕉 其角 現 淡く

糸さくら〜もろりらあさ〜花の雨 蕉門 大坂 京 淡く

雪霽我に勝るとの昼間 日門 大坂 路通

名月や真秋杉原唐河 日門 尾名古屋 野坡

海〜〜〜 日門 尾名古屋 露川

六宗因 西鶴 現 才唐 舊徳翁

鮎ハ花ハハハ 日人 西鶴

妻ハ梅子み〜色行や小ハ伏 大坂 才唐

六貞徳 重頼 現 鬼貫 大坂 鬼貫

舌野氣のま〜れてハ〜林のそ 正秀門 大津 松

盆も海〜〜〜 正秀門 大津 松

○伊賀上笠連

六貞徳 季吟 芭蕉 其角 現 原松 狸菴

本意如〜や女を入娘ハ山ハ〜 狸菴 原松

行善を何と〜 狸菴 笑鴈

多〜ハ茶〜 狸菴 菊而

葉の〜如〜本質師の膳乃〜 狸菴 芥仙

態物〜 狸菴 桐雛

云芳聖ハ花〜 狸菴 省我

神鳥を答〜 狸菴 松甫

筆〜 狸菴 記之

天正年中伊賀久米郡主菊岡丹波行任

現 房行 沾涼 實録史書

●行宣 菊岡隨性軒

行尚 畫程書

現 行重 記之

和歌ヲ善ス

世談一統三百卷編書其外述作有多

現 行 有隣

伊賀

父承乃袖合山九品寺に在余のころ

碑を之とすこをうて

性軒如幻

まふの神念ふまげくか明生の爲かまふと久と

五十嵐の春沾涼と云ふ山あり

菊岡

農而そのかひおらふ今畑の云

行尚

題 晴賞

伊賀

うらむす十翁ハ八翁の仲間と云

菊岡

記之

享保十三申のゆき布地故つち振くまはりて雲
對する軟層多し一軟念すの時

伊賀 菊岡

糸種をんをむはらの夏木立 有隣

政園今右もたりもる楓 布仙

○勢州山田

芭蕉門人

影之流る幾の枝や昔わたりし由

團友山田

雲とかなれ者ののる里和時多 芦本

○紀列之連

須原 垣内

公里下獨味口借しとんさう 環山

式人なめはくしあつてを尋

かこよせう枝とくを柳しる 冬嶺

目子水世亦之之了被之如
 水海之志の可中流の酒
 輝踊了舞花之舞神外
 心也世之海也何事
 有美事北流花系心
 げ下下が之種之志良家
 握の葉子等而花成之流下
 不之流中流中葉の野
 蝕物之字に成何之字之解
 海也也之之之之之之
 不月下魚子之流一流之
 水子其流絶也抱一月来之

舟
 珠
 山
 豐
 山
 井
 舟
 山
 井
 山
 山
 嶺
 井

深心の産物

積つて心よ時雨の音が
 一段天の音をうら
 塩魚の肴をうら
 海士の湯場をうら
 裸を研、湯場を、被るる
 菊と豆腐は仕中
 藪入の矢魚をうら
 裏吹巻の音をうら
 切言を鶴鶴にうら
 紙絶の枝をうら

朝
 涼
 仙
 布
 雪
 比
 布
 夕
 雪
 夕

八宗の殿の悟通子屋らゆき

布仙

船を押出せ取屋八有

々

儒者教乃唐へらつて三田戒

々

きぬもくぬもきせれ一本

々

目てつてはききぬの鶴子昆布

書翹

もめぬいふと羽扇論中

布仙

月の昼花の束も那一男も

沾源

機安一むくハ七三二つふ

書翹

寺西幸教屋高塚いかに

布仙

我かかかかかかか自増

々

欠かかかかか小地かかみ

書翹

比血尾ハととととと吸ハ

々

多江有り鶴ハ意ハハハ

布仙

臨附ハ借ハ高ハハハ

々

聲ハハハハハハハハハ

々

云明ハハハハハハハハハ

書翹

堂云ハハハハハハハハハ

布仙

物ハハハハハハハハハ

書翹

つハハハハハハハハハ

々

所宅ハハハハハハハハハ

布仙

信馬衆の拍子ハハハハハ

書翹

よハハハハハハハハハ

々

大ハハハハハハハハハ

々

つハハハハハハハハハ

々

その板の五膳のうの花は花
世はむよし卯比二月三月
布山
注涼

題東敷山鐘

雪朝甥
石舟氏
叙史

師不知 松木氏 宗因門
政則 同苗 現
蓮之 同苗 現
文雅 同苗 長子

毛吹草
花の散る落やみの至の極は
政則

江戸八百員
お常り 天物も
青雲

續江戸哉
何人の度より度次を小求問案
蓮之

神至より大根物せて落葉江
文雅

七夕

七夕の藪の底は始あり
卜宅

棒とめて大縄子遠く望乃あり
梅宇

天北川 望乃あり
吳竹

山多を今春の夢へま帰望
占涼

傍りて身は望子傍り 物屋由井沖津
原之

煩惱を一袖に流せ天北川
李條

一月を力と後望天乃川
麟石

お後望の舟なり 幾長う銀河
仙理

牽牛や枕のひをるお望
素琴

度根望の舟なり 幾長う銀河
左隣

浅水云男も 幾長う銀河の川
柵絃

朝顔

あさるるやうの茶碗菴田川
 物と申す朝顔の人の福の神
 おさるるやうの徳美其の抱と桐
 朝顔や葉子と徳美其の抱と桐
 あはれや申す徳美其の抱と桐
 ちかとしとんと申す徳美其の抱と桐
 ちかとしとんと申す徳美其の抱と桐
 ちかとしとんと申す徳美其の抱と桐
 ちかとしとんと申す徳美其の抱と桐
 ちかとしとんと申す徳美其の抱と桐

奉月
 蓮之
 涼子
 嘉祥
 山丹
 瓊前
 有林風
 中車
 沾津
 沾徳門

目

月光の草花はけしめや細徳
 今宵の如く霞りてをるる馬
 名月やあつらふと元徳の馬
 里ハ交る頃子此谷 窓中一外
 世界皆昼を樂屋よりあ月
 老の月昔より元徳も子徳放し
 名月やあつらふと元徳の馬
 名月やあつらふと元徳の馬
 名月やあつらふと元徳の馬
 名月やあつらふと元徳の馬
 名月やあつらふと元徳の馬

逸志
 壽角
 卜宅
 丈岳
 魚路
 鶴史
 安祖
 夕佳
 有佐
 菽葉

百補子白際雲クヤキ小の月

竹裏

名月や襟——くまよ家女此子

琴月

極目と目暈らふてよはしやの月

吉田氏 賀角

月洗や衣冠のつり羊此系

北尾氏 千洗

侍る月の月ハ物うら三の蕭索

竹田

肉なき仁王の後子流此り

信州 三省

高きもよもも西からく高き此月

信州 三省

感もろく一川頬ゆらる此の月

油凉門 仙魚

羊の心と漢捕式部——十三夜

津尾 芦玉

新月やわきぬ下流の店

仙菓堂 陽秋

くまの小葉を——十三夜

仙菓堂 五山

秦姓丈岳稿

毛ろくの鳥の中よまをて月雅なるハ鳥
 鳥のハ月雅此のかりしハ鳥人かこらえ
 くまのぶまはこ——風雅の和制ハこま
 よびなりうらひさし——鳥ハく鳥ハく——
 風ハ諷——其財ハく鳥ハく——雅ハ正——
 風ハ大ハ雅ハ早ハよハ人ハあハ海ハ
 海雅ハれハかりハ鳥ハく——温ハくハるハる
 或雅人湯浴ハれハ鳥ハく——鳥ハくハるハる
 何ハ熱ハくハるハるハるハるハるハるハるハる
 さハくハるハるハるハるハるハるハるハるハる

おのちのちと云ふ由を説くはまゝと云ふは

世といふもよこしたるはしんく物也香

又云むつゆる人の子も香なると云ふは我むすあ
るをそのをその子に給しとくして香遠伝ふは
室の連船おれ人おれもあふは風雅に歌連船の
風雅の根元を述べては遠を言ふは香を言ふは
雅人といふともさつづ中にもすれを言ふは
香を言ふはつづまかなる事よ南まら我意あつく
象慢の物なりて馬やおとる人あり風雅のみら
そのよあつてはあつてはつづまかなる事よ
つづまかなる事よ

評 總

香のよあつてはあつてはつづまかなる事よ

二〇七

人のなる月あり風あり 照園庵 丈 拈

独吟

あつてはあつてはつづまかなる事よ
つづまかなる事よ

我家の通して影 あつてはあつてはつづまかなる事よ

あつてはあつてはつづまかなる事よ

茶儀を志すはつづまかなる事よ

情よかけこたふはつづまかなる事よ

夏冬を割てはつづまかなる事よ

所用のわらわはつづまかなる事よ

一軍せんとはつづまかなる事よ

細と細のつづまかなる事よ

六調和 月風和

江原氏 調和門 現 調柯 同苗長子 壺仙堂

先生と因て早羊外かゝぬ序を承るる今も

天を遊し、神音の神音奉々き風和

海より竹と花と肉のさし調和

夜梅

照る下梅多しへし星のまゝ水也 調柯

六介我

只

我尚

石母氏 総列錯城住

周午

同苗 長子 同所

神くを月かたすうの不聖なる 介我

鳥の雛に二月のさきさたり後里 我尚

見とるさし書古の里と茶とくさる 周午

良夜

名月と秋の節白の人通里 咫尺

羽翹へるさし見申るころ小北月 沾涼

名月やうらひさくちなりぬいせの海 程

秋の野

片浪此一里ハ直き聖きくハ 魚路

惜もとこしは海嶽をまぎく海嶽首 倫仙

唯よりりお糸焚野の積茶屋 三輪氏 蘭看

虚在僧の下跡よりそるるおま外 吟因

身をあむるお聖成おの上足外 有舍

百姓の法とついでんれ聖くお 沾雪

一城を足とる 淋の花聖かみ 沾雪

重陽菊

大隈之子 種の中ハ菊草

高き枝に 菊ありて 秋の意

長き枝に 菊ありて 菊の足

手は枝の 皆涎なり 久く 菊

菊を香し 菊を香し 菊を香し

九羊酒の 目にも 菊の菊

生植

沈む日 下流ありて 葉繁茂

菊栗下 流乃耳 小夜 秋

かゆす 流下 里ハ 菊の推 風

中

千生門 雲浪堂 龍角

感生舟 鶴史

向井氏 卜宅

英松

沾涼

雪朝

荳山

麦丸

賀朝

五山 具遊

文久の ぬれ 糸子の 菊川 外

不化寮の 玉章 菊の 菊川 外

菊菴の 菊の 菊の 菊川 外

氣秋

菊の 菊の 菊の 菊川 外

菊の 菊の 菊の 菊川 外

菊の 菊の 菊の 菊川 外

菊の 菊の 菊の 菊川 外

雑株

菊の 菊の 菊の 菊川 外

菊の 菊の 菊の 菊川 外

菊川家士

交月人

白角

調山

沾涼

調柯

立百武

智十

一甄

如水

紀列若山

水戸住

吟市

露岳

露門 龍泉舎

花國 芳名を出し人環り
 如也く出く乳いお肉也とも羅け
 人ま糸の人まぬをするかりか
 大まよやけぬの氣のわりの産
 牛橋を又るよ那ましぬの音
 新酒やその路のわりの星
 小東隆をくすえて明を平
 いよせんあまの儀 金林寺
 秋月の海土も敷するいよる浪
 多狭子陰へあまのうりまのま
 野とゆのあまのうりまのま
 秋情を羅しぬまの和松一本
 須貝氏 露庭
 小野氏 鶴史
 十箇門 右月寺
 露門 美世堂
 加島氏 好夕
 十箇門 善角
 快山
 如雲
 市紅
 水戸住 仲山氏
 沾橋
 沾涼
 雪朝

沾涼子の後諺彼機と建家名始
 誹祖以東當世乃至門弟と携家
 宗道乃流々といひ一匡一
 系流と洋行してて従わ
 次に古往此明師より累世光達
 及現在作者乃後与集くされと
 緯と一 最後にも合歌仙等

激くは雑草と成せしむく控候
 ありしはるるきり古風の公道あり
 中比の付きあふ今此地好波の奉
 なし吟嘯乃泣眸と物ささそ
 取しはるる地ありきりやそと云爾
 涼子の請ふ處て野叟下宅漫に
 跋寸顛鄙陋と恥家而已

詩 僊

冬ささゆ九輪川好くあふ如
 妻も兼ふも香梅おろす風
 寒うけい大いさよ座をこく
 丁卯舟ナラらぬあやむい五人
 森あつく東の朝日いづも月もあ
 拍子いさく流白く鶴匠
 陽さぬの生田やあきてるあふ秋
 秋若く留士をかめよかきり
 もくらんと是も是の初あや秋
 短し一度子味暗大豆の古燈
 魚路
 魚路
 魚路
 魚路
 魚路
 魚路

新葉し〜と〜と折れ格乳止
 裾きんがりの吹上り松
 塙邊の道身深し舟北渡
 い〜の昨は林香の白
 隅へ一籠乃息のゆづ里金
 りれ極千一や所村の鞠
 物のいふ元子とるり海七里
 久〜き〜魚六ちの月又ら〜
 作保娘の未と妹森と〜
 海〜の海はぬの洗操保と〜
 草鞋を流さう〜
 茶酒保娘と〜

魚 16 魚 16 魚 16 魚 16 魚 16

昔はるる里起るる子合ふ天気が
 目んよ目んえ 目ん〜
 舟難ひと〜
 何〜や〜
 何〜の裏ハ馬さ〜
 何〜下タ〜
 何〜の膝よ〜
 何〜を扱出ス〜

魚 16 魚 16 魚 16 魚 16 魚 16

土はまをてしむしの糸は花の人 16
不也のりし此 春の一詩

西園の落葉の春帳或は茅屋の草のひたすらんよの
うしや言ふや。春のの葉をひたすらんよのひたすらんよの

とふいかにくひよめくおとさす 春帳

秋来ぬし見えく赤葉のりし 春帳

仁相傘の六分八分 千翁

義小のく自はも後さぬ 不扁

禮先の望まぬ後さぬ 玲角

智と燕の望まぬ後さぬ 奇角

信の望まぬ後さぬ 辰角

信の望まぬ後さぬ 辰角

玄指

涙り初梅の長きを 露沾

小春

拈入乃代とひかりを 狸

一休の袖下真一 調柯

時雨

藤巻すて答の羽を 雪朝

全盛のうほを 賀朝

草樹の葉のそを 柳塙

雨はも雲の指を 千翁

始雲は滑り 善珠

子雲は滑り 調山

伊賀上笠宗通

霜氷

まの葉や馬さへ霜ぬ草空
恙てもく蚯蚓よんまの照り
のり響くまのりく産むお天香
立雪のまのりくぬ氷の如

冬川

入水をおびけりや冬河原
幣の如き水のさびきや後一社
よきそい金の蓋なり冬川
川面うの如き指さる一枕の上
白鷺乃村文景一水川
牧方の鳴き響き一庭食舟

落葉

果は皆佛一乃通子落葉外
入相子撞のこきれて落葉く如
頃日の下弦のまのりく木の葉外
落葉乃治郎老乃小倉山
乾て麻てゆま木の葉の一外
枝晴もて本分一羽おら葉外
枝と枝をのこをさる落葉外
又不のかぬ菴ののこらとら
豆腐の尾上舞れ落葉うら
小鹿子体んて通る落葉外
一志ぬま今年の卯のあらと外

穀我

英松

周鮫

竹裏

丹志

呉竹

東止

沾涼

臣女

泉竜

蓮之

雪朝

波鶏

梅宇

東岡

呉竹

涼宇

紅夕

漁光

鈴角

李條

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

ちり花て入道と足跡の本葉外

郡山

匍匐

友とれの馬好の竹のちらしを

溶

天は不測の事あり人は塵妻の質あり
今こそ芥子もまぢくもて

きぬくの悦八所 産葉外

玉全

禁はの青の馬禁の跡葉外

沾凉

酒にの底を添ふる産葉外

千本

雪

うつらや神雪の滝才乃角

長水

白好やとて愈て七景あのみ書

賀朝

白灰の雪好く雪の料理福

千洗

きぬの肌のを敷く雪修ひ

雪朝

より幕や五つうらまの書かや

其孫

うつらよかひく葉比翼楫

扇的

うつらや根葉葉上打のみ

有林

龍又世

龍又や方十所ハ正月丸

魚器

あそり打冬至の梅は神葉

露夜

龍又や青く娘かみん

夕佳

枯野

あそりい書はもまどを津のこ

卜宅

さくろ海まはるこめぬうも死外

東隣

枯野の形や書法のうらま

百二

あそりい及の油のかりこ世外

布仙

和歌

えびのきりだおらるる

三竹

千鳥

蔚然、林裏に叶ふらん外

九百廿

眠るると長巻の東の漢を

傘車

さしたるを、動して并を漢らん

樓川

唱て居、物々、御も小兵も

楚煉

毎房を、ととを、原もらん外

紅夕

ぬけ、らひきの、人を、るる外

布仁

寒

技志、く、善の、あり、こび、らん

未石

黄、染、の、種、の、ひ、き、も、さ、む、らん

九百廿

雪、の、氷、の、根、生、乃、を、らん

万葉集 千鳥門 鵬角

秋の、あ、ま、り、を

露言門

蓮の、実、や、死、し、も、お、れ、に、あ、中

尺草

尚集、養、浩、の、初、人、草、老人、一、集、の、首、紙、を、び、り、て、
あ、ま、り、を、を、こ、ま、り、を、ま、り、こ、う、十、一、古、人、よ、あ、ま、り、に、
あり、と、感、懐、せ、る、を、千、葉、集、に、も、つ、ひ、つ、を、こ、ま、り、に、
く、し、と、し、あ、ま、り、を、か、お、て、い、る、を、も、加、へ、ん、を、し、り、に、ぬ、
を、得、ん、と、お、の、は、さ、り、に、八、十、葉、集、の、あ、ま、り、を、こ、ま、り、に、
古、人、の、部、を、い、く、ゆ、も、あ、ま、り、に、く、な、り、ぬ、を、い、て、
の、去、此、不、遠、の、を、指、お、れ、在、ら、ん、を、こ、ま、り、に、
の、去、此、不、遠、の、を、指、お、れ、在、ら、ん、を、こ、ま、り、に、

生植

京宗西

石寺菴

水、伝、や、馬、より、様、子、抱、ち、る、一

暮四

茶、の、花、や、死、知、る、を、お、梅、の、花

沾梅

ひ、の、こ、り、と、あ、ま、り、の、梅、を、一

雲門 古藤軒

枝、を、葉、子、見、る、分、つ、水、伝、花

吟竹

水、伝、の、み、を、見、る、女、者

溶く

障子子ハ條子を結して冬雜

左隣 雞

足跡のそとより 着せしめられ外

沾涼

勢飛して松の腕 髪を乃滝

好夕

炭俵あきくや人を八王子

千露

そのあきを楠云信 苔汁

安祖

おしーやまのまじーの二里抗

梅五

おしー乃色ハ鹿のしーるを

有佐

黄小ありひよこを嫌ー衣既里

布仙

汲小ごす様のはしりや淀八裾

涼

明日の羊尾

沾涼

明日の羊尾 尾 漏毒事

人丸大明神聖像

宗祇法師恭敬像

杉白木御長五寸五分

頓阿法師作 任吉奉納一軀

御筆後以岸姫松作之

正一位乃る儀ハ於阿比岐の作宗祇法師之教

乃君信じて宗教すつらる侍賀國上野飯東氏

喜三 生因尾州滑洲織田家士 後為醫藥居伊賀國 其宗教の門人なり

あつちを御屬ト是政安 其左門落後ノ 号三悦沾原父

取多而後服部土芳 半在唐ト云 芭蕉高弟ニあつち年あり

一十余年以そ宝永のころ予故即ハ其の

初世係を尋らるゝ土芳も早古人し素ゆ
まなりし誰いなる人し後ありは政安の土芳乃
甥不津宗七郎と云ふとあるとあると通つて
同土宗七云土芳在世の時以脚来り九余日そ
より連誰をいふはありて後彼係を尋嗟して
賦情し及よふてと云ふ人のいふも
大神の宝號ありして出と云ふ人の紙に
天満宮宝號一幅 山崎宗鑑筆 山口不貫書
記ししと云ふ事ありていふは長門の
今かりしし于時享保十四巳酉の春道芝と云
ふ人のいふは北礼倫仙条之助人いふは
我の人意の係あり是れは是れいありし連歌師

乃不指行りて謂ある係し連歌の會ふとい
杖をいふはと云ふ事を知りし沙の係し
今より我の應せしと云ふ係ありていふは
五月廿二日倫仙世係をとりてと云ふ事あり
ありて全ねし職合の最ありと云ふ事あり
辭してと云ふ事ありと云ふ事あり
そのとら人の心を問ぬ是山口不貫生国長門国藩州
享保十四巳酉年
于時廿二日人丹野紫押 道芝ノコし 受くと云ふ事
ありていふ事ありと云ふ事あり 信あり
ある事屋いと云ふ事ありと云ふ事あり
鎮守神田宮の境内に遷座ありと云ふ事あり

人店大明神法樂

影うつすもくも新樹乃高角山 雀上登壇
現るる石見の出入 朝清の 菊田
床一さやほのくの帆、松の肩 同 松上

遠立の連各法樂

六の神の鳥帽子なりし和白糖丹 宇田川志
帆かやうの海や茂るや神の成 笠井
高しゆよの河一葉し花外本 中島
初より井一あまに浮くや雲の成 河津
多の垣もあま一は華の雅作り 小森
みきりしやみうたも通を花うぬ 岩田
等しきやそとこもむるは神標 北原備

ゆかしの秋の神話のやし何 冬木賀朝
神一詠いさえくきしほしん 北原備
ゆるそしに唯心の葉を あまの風 栗木雪朝
此見一唯今在、此うの笑 川勝文策

○標本人丸 ^{古今} 七の大事の因なり石見國戸田郡の

八森の標の末のそあまの臺形そ出祝しきり
石見國より化生まよと云事、口使

神龜元年二月十八日年、口使

持統帝文武帝聖武帝平城帝等と沙々の標
式人の云其御家ほく、古今の事、その集、



荒蘭崎

○下
○世
○月をこせりてるまき
魚路

五石蔵の之甚を鳴りて代の鶴

鴨立沢 林にそちふふ

西沢の川魚をわらわら

湯本

小里森の池の底を角乃智

二子山

夕多しきりしり 内北より二子

箱根社

水たしり九尺の釜にそちふふ

略書目録

増補諸用交通自立 市家流系書先生書
手紙文入 全冊

隅田川詣 中石ふ書
手本向 折本巻帖

諸家必用 橋正毅書
出札文系流系入

年中姓来 守沢光先生書
全一冊

消息姓来 長田先生書
手本向

江戸姓来注解 高井榮山述
手本向 全一冊

高貴姓来 市家流系書先生書
手本向

高貴姓来講釈 全一冊

聚玉帖 日七
書札後名入

護身姓来 平仮名付
全一冊

田舎姓来 市家流系書先生書
手本向

大金消息姓来 講釈入中本
全一冊

農家文字 玄水堂先生書
平仮名付

六論析義 全一冊

和利近道子寶 平仮名付

魚貝字尽 平仮名付
中本全一冊

東都書林

日本橋通巻目録

須原屋茂玄清藏

